

## もう奇跡とは言わせない ～ラグビーワールドカップベスト8の軌跡～

＊

加藤正幸●かとうひふ科医院（伊勢原市）

昨年ラグビーワールドカップは大変盛り上がりしました。日本で開催されたこと、日本がベスト8に入ったことなど本当に大変な騒ぎでした。私がまだ中学生の頃に第1回（1987年）大会が始まりました。日本はワールドカップではなかなか勝てず、海外選手のプレーに驚き、胸を躍らせた事を今でも思い出します。生で観戦したのは第5回（2003年）のオーストラリア大会が最初でした。私は中学、高校、大学とラグビーをしていましたので、当時はワールドカップを見て研究し、練習に励んでいましたが、医師になりラグビーを引退し、純粋にラグビー観戦を楽しむ事ができました。この当時、日本ではマイナースポーツで、あまり取り上げられたことはありませんでしたが、オーストラリアでは、どのスポーツバーでもラグビーの試合をやっていて、大変盛り上がっていたことを記憶しております。

第8回（2015年）のイングランド大会の対南アフリカ戦が今大会の盛り上がりの序章になります。今までワールドカップで1勝しかしたことのない日本と、過去2回優勝している南アフリカとの戦いになります。当然大方の予想は、南アフリカの勝利で、試合前の英国ブックメーカーによると日本の勝利が34倍、南アフリカは1倍と全くの南アフリカの完勝ムードでした。試合内容は大方の予想に反し、接戦のまま後半残り5分で3点差の僅差で日本が追いかける展開で、日本の猛攻撃が始まりました。試合時間の80分が過ぎた時、敵陣5mで南アフリカが反則し、日本はペナルティーからの攻撃の権利を得ました。ペナルティーゴールから同点を狙う選択をする予想されましたが、リーチ・マイケルキャプテンは、スクラムを選択しました。この選択は誰もが驚き、のちに賞賛された選択でもありました。「南アフリカ相手にスクラム組もうぜ！」と実況され、スタジア

ムで応援しているイギリス人女性は「カモン。ジャパーン！」と会場は大盛り上がりでした。スクラムからボールが出ると外へ外へと展開し連続攻撃、最後はウイングのカーン・ヘスケス選手にボールが渡り、トライして34対32と歴史的勝利となりました。ラグビーは番狂わせの少ないスポーツと言われる中、「世紀の番狂わせ」と言わしめた日本チームに勇気がわき何度感動して泣いたことでしょう。

ついに2019年、第9回ラグビーワールドカップが初めて日本で開催されました。日本はアイルランド、スコットランド、サモア、ロシアが属するプールAに入りました。私は大学で一緒に汗を流したラグビー仲間誘われてロシア戦を会場で見ることができました。日本開催で開会式後に行われたロシア戦では、緊張でチーム全体が浮足立ち、日本のキャッチミスからロシアに最初のトライを奪われました。その後緊張から解放されたのか徐々に日本は力を発揮し始め、13番（センター）ラファエロ・ティモシー選手から14番（ウイング）松島幸太郎選手への「ノールック・オフロードパス」で初トライ。オフロードパスの良いところはプレーを継続し勢いをつけることができることですが、オフロードパスは片手で



開幕戦 東京スタジアムにて（筆者：中央）

パスをすることでミスが生じやすく、ボールを奪われて相手の攻撃チャンスを作りかねないのです。ボールは両手で持ってパスをしろと言われた私たちの学生時代にはほぼ使われることがなかったパスであり、2015年のエディー・ジョーンズヘッドコーチ(前日本代表コーチ、現イングランド代表ヘッドコーチ)の時代も日本代表は禁止されていたパスでありました。しかし、このパスを機に日本が攻勢を強め、松島選手のハットトリックで、合計4トライを挙げ、30対10と完勝しました。会場で見えていた私はトライを取るたびの大歓声と感動は今でも忘れないです。

第2戦は当時世界ランク1位のアイルランド戦で、アイルランドは鉄壁のディフェンスと強靱なスクラムが特徴で、これまで9回戦って一度も勝ったことのない相手でした。アイルランド戦前に現日本代表のジェイミー・ジョセフヘッドコーチは「誰も勝てると思っていない。接戦になるとさえ思っていない。でも誰もどれだけハードワークしてきたか、どのくらいの犠牲を払ってきたかを知らない。やるべきことはわかっている。一切恐れなくてお互いを信頼しみんなを信じている。行くぞ!」と言って送り出したそうです。前半34分、相手ボールのスクラムを押し切り、相手の反則を誘い、プロップ(フォワードで3番)のグ・ジオン選手がガッツポーズをし、世界トップクラスのアイルランドのスクラムに勝った瞬間は皆様の記憶にもあると思います。日本のフォワードが1センチ単位までこだわって練習してきたスクラムが開花し、日本を応援する我々は「よし。いける」と思った瞬間でもありました。その後、後半から投入されたウイングの福岡堅樹選手が逆転のトライをし、日本は19対12で勝利しました。「もう奇跡とは言わせない!」とアナウンサーの声に大興奮でした。

第3戦はサモア戦で、この試合は流行語大賞にまでノミネートされた「ジャッカル」という言葉を世に広めた試合でもありました。「ジャッカル」は相手の反則を誘うためにも有効であり、後半9分に姫野和樹選手が相手ボールにからみ反則をとった瞬間からこの言葉が使われました。後半はこの「姫野のジャッカル」が日本をことごとく救い、戦況を見つめていた田中史朗選手が後半から出て流れが変わり、ウイングの福岡選手、松島選手のトライにつながりました。最終的には4トライで38対19と勝ち切



大学時代のラグビー仲間とエトセラ

りました。

第4戦はスコットランドとの因縁の対決となります。前回の2015年のイングランド大会で南アフリカ、スコットランド、日本といずれも3勝1敗でありましたが、勝ち点の差で日本は決勝リーグに上がりませんでした。日本の唯一の敗戦がスコットランドでした。今回のスコットランド戦前にリーチ・マイケル主将は「個人的には、スコットランドをボコりたい」と言い放ち、頼もしい主将の一言に「キャプテン、ついていきます」と心の中で日本国民が強く思ったものであります。前日の台風19号の影響で何とか試合ができた一戦でもあり、試合は被災者への黙祷から始まり、日本は前回のリベンジ、スコットランドは決勝リーグに行くために必ず勝たなければならない相手であり、お互いの気力体力がぶつかり合いました。最初はスコットランドにトライをとられましたが、福岡選手からのオフロードパスで松島選手のトライ。圧巻は連続のオフロードパスによるプロップ稲垣啓太選手のトライでした。フォワード、バックス一体となった攻撃で今大会絶賛されたトライの一つでありました。その後も優位に試合を進める日本でありましたが、残り10分は相手の攻撃を何度も何度もタックルで止める日本選手の姿に感動し、とても長い10分間でした。28対21でノーサイドの笛がなった瞬間、自宅で歓喜の声を上げ喜び、初めての決勝リーグに胸を躍らされました。

ラグビーには「ノーサイド」や「One for all. All for one」という言葉があります。2015年大会は「JAPAN WAY」、2019年は流行語大賞にもなった「ONE TEAM」というスローガンで戦いました。外国出身選手が多いチームをワンチームにするために

作られた「カントリーロード」の替え歌であるチームソングで「ビクトリーロード」がスタジアムで歌われました。

「ビクトリーロード この道 ずっとゆけば 最後は笑える日がくるのさ ビクトリーロード」

この歌は、チームだけでなく、日本を一つにしました。2023年のワールドカップフランス大会もぜひ注目し、日本を応援したいと思います。頑張れ！日本！

## 山上の光賞授賞式

＊

### 野村有子●野村皮膚科医院（横浜市神奈川区）

令和元年5月21日にパレスホテル東京で開催された第5回「山上の光賞」授賞式に、公衆衛生部門で受賞された医療法人徳洲会仙台徳洲会病院医師加藤邦夫先生の推薦者として参列する機会を得たので、賞の意義と授賞式の報告を致します。

山上の光賞は「健康・医療・医学分野で活躍する80歳以上の現役の方々を表彰する」もので、公益社団法人全日本病院協会、一般社団法人日本病院協会、セルジーン株式会社の3者が共催しています。前年度まで75歳以上を対象としていたところ応募者が多く、今年度は対象年齢を80歳に繰り上げたとのこと。公衆衛生部門のほかに、医師部門、研究者部門、看護・保健部門、NPO・ボランティア部門があります。今回は次の6名の方が受賞されました（年齢は受賞時）。

医師部門：鬼塚卓彌氏（昭和大学名誉教授、88歳）

医師部門：横山宏氏（特定非営利活動法人山梨ホスピス協会理事長、91歳）

研究者部門：遠藤正彦氏（弘前大学名誉教授・客員研究員、82歳）

看護・保健部門：江藤信子氏（江藤助産所所長、91歳）

NPO・ボランティア部門：富安兆子氏（高齢社会をよくする北九州女性の会代表、85歳）

公衆衛生部門：加藤邦夫氏（医療法人徳洲会仙台徳洲会病院健康管理室医師、88歳）

受賞された皆さまは、永年にわたる顕著なご功績をお持ちの上に、授賞要件のとおり現役としてご活躍しておられる方々です。

私が推薦させていただいた加藤邦夫先生についてご紹介いたします。

加藤邦夫先生は、1960年に東北大学大学院で医学博士の学位を取得され、学位授与式を待たずに医師不在であった岩手



加藤邦夫先生（中央）と筆者（右）。左は加藤先生に賞を手渡された道永麻里日本医師会常任理事

県沢内村・村立沢内病院に派遣されました。当時の沢内村は健康面でも財政面でも岩手県で最低でした。加藤先生が初めて依頼を受けた往診はとても衝撃的なものでした。何と軒先で首を吊って亡くなったおじいさんだったのです。息子夫妻に自分の財布を渡したあと、「食いぶち減らし」のために自らの命を絶ったのです。このような状況を改善することに専心していた深澤晟雄村長に、加藤先生は病院の改革策と沢内村村民の健康改善策を提案しました。国民健康保険の自己負担が5割の時代で、加藤先生は自己負担分を払えないために診療を受けられない村民が多かったことから、自己負担分を村が全額負担することを提案し、法制度上の多くの難問を村、県、病院の協議によって乗り越え、65歳以上の医療費を全額無料化する条例を実現しました（対象年



齢はその後60歳以上に引き下げられました)。いわゆる老人医療無料化を全国で初めて実施した施策で、加藤先生はその中心的役割を担われました。

加藤先生は当初1ヶ月間の臨時赴任を予定していましたが、自ら提案した施策を実現するために15年間、村立病院院長を務められました。その間、村民全体の健康促進に尽力され、村民の疾病調査、死因調査、さらに村民全体の健康診断を実施し、そのデータに基づいて健康改善のさまざまな施策を提案され、「沢内に生まれた人が120歳まで元気に生きるような健康づくり」として、村と病院を包括する機構改革を推進されました。その施策の一つが加藤先生自ら設計された「沢内式健康住宅」です。豪雪地帯であることを考慮して、居室を南側に配置し、窓を大きくとって冬でも陽が入るようにしたほか、雪降ろしを不要にするために屋根を急傾斜にし、落ちた雪で窓がふさがれないように床を高い位置に置く、という画期的なもので、瞬く間に全村に普及しました。また、保健師を各家庭に派遣し、当時塩分の多い食事を指摘し、減塩したバランスのよい食事指導を行い、予防医学にも尽力されました。このような取り組みは村民の健康を守りながら、村の医療費を抑える成果をあげ、「沢内方式」として高く評価されました。

加藤先生は1975年に沢内病院院長を退職されたのち、仙台市衛生局で公衆衛生行政に携わり、1996年からは仙台白百合女子大学教授に就任されて研究および若い世代の指導育成に当たられました。現在は仙台徳洲会病院健康管理室で多くの方々の健診と健康管理、助言にあたっておられますとともに、公務の傍ら、自立した老後生活や引きこもり防止などを目的に、親しみやすく誰にでも気軽に参加できる講演活動を活発になされて、あらゆる人が健康な人生を送るために、個人、家族、住環境、地域社会、国があるべき形を精力的に説いておられます。

私の父・小野寺伸夫（故人、厚生省厚生技官、埼玉県立衛生短期大学学長ほか）が1962年から1968年にかけて岩手県北上保健所に勤務し、沢内村の諸施策に尽力し、沢内村健康管理研究会に岩手県側委員として参加するなど、同年配であった当時の加藤邦夫院長と深く公私の交流がありました。父の遺品にその当時の原資料を見つけ、加藤先生にお送りしたところ、大変貴重な資料であると感激され、加藤



安倍総理大臣と6名の受賞者

先生はこの資料を「現代日本地域力資料集成 西和賀町(旧沢内村)生命尊重資料 第7巻」(すいれん舎、2017年)に収録されました。全9巻からなるこの資料は国際的に高く評価され、米国スタンフォード大学図書館等に収蔵されたと聞いています。

加藤邦夫先生は父が敬愛し、盟友でもあった方であり、私自身も大変尊敬しております。

5月21日夜に開催された授賞式は大変盛大なもので、参加者は恐らく300人はいたのではないのでしょうか。審査委員を務められた安西祐一郎日本学術振興会顧問（審査委員長）、坂口力元厚生労働大臣、樋口恵子東京家政大学名誉教授、元宇宙飛行士の向井千秋氏のほか、歴代厚生労働大臣、医科大学学長、医療関係団体・経済団体等の代表、国会議員など参列していました。

授賞式は共催3団体各代表の挨拶の他、来賓として根本匠厚生労働大臣の挨拶がありました。そして当初の予定にないサプライズとして、何と安倍晋三総理大臣が登場し、祝辞を述べられました。ウィットに富んだスピーチの後、受賞者一人一人と握手され、記念撮影もされて、受賞者の皆さまはさぞや嬉しかったものと思います。乾杯ののちディナーがスタートし、ディナーの途中で3名ずつ、受賞者の紹介と賞の授与が行われました。受賞された皆様のスピーチはたいへん感銘深く、80歳、90歳を超えてなお社会に貢献しておられることの素晴らしさとお人柄の魅力に圧倒されずにはいられませんでした。

ディナーのあと、テノール歌手の西村悟様のすばらしい歌を楽しみ、散会となりました。

受賞された皆様からとてもたくさんのパワーをいただいた一夜でした。